英語科

学習用英和辞典に関する一考案
——挿絵、写真、図について——

平松良行

【抄録】高校生を始めとして、世間で広い範囲で使用されている学習英和辞典について、そこに使用されている挿絵、写真、図について、その頻度と、取扱いの妥当性について調べてみた。使用されている例文が up-to date であることを要求されている一方、そこに掲載されている挿絵（とくに写真）も現代に即応しているかどうかを調べてみた。

【キーワード】挿絵、写真、図、up-to-date

Ⅰ．はじめに

最近の大学入試問題を見ると、センターテストを筆頭に visual な形式のものが増加している。Listening の増加と相俟って実用的、実践的な方向を重視し、平成6年度より実施の新指導要領で強調されている『コミュニケーション重視』にもつながっていくことで、歓迎すべき傾向である。

したがって、学生（主として高校生になるが）が日々使用する英語の学習辞典についてもそれに対応すべき措置が取られるべきである。最近は語法や語の微妙な違いも詳しく説明され、使用頻度までコンピュータを駆使して出してあり、学習用辞典に限っていえば、英和辞典はほぼ世界最高の水準を行っているといっても過言ではないと思う。

わかり易さについていえば、たしかに「挿絵に頼りすぎて、言葉によって説明しようとするぎりぎりの努力が疎かにされる結果になりはしないか」という懸念も生ずるかもしれないが（『英和辞典うらおもて』岩波新書 p.158）英話辞典は一般の生徒が使用する限りは事典の要素も十分に持っているべきであって、特に現代のように科学技術の発達が著しい時代においては少なくとも名詞に関しては言葉だけでは表現しにくい面が多々あるので、サブタイトルにあげた、挿絵、写真、図の助けは大いに借りるべきであろう。

英語に "Seeing is believing." という諺があるが最近の英和辞典は挿絵、図が豊富に使用してあり、とくに写真の増加が目立っているようである。そこで、今回そうしたものが学習英和辞典のなかで、どの程度、また、どのように使用されているかについて調べてみた。

Ⅱ．英和辞典の全体に占める挿絵、写真、図の割合い

次ページのように主な学習英和辞典を8冊と参考のためにアメリカ、イギリスのいわゆる英英辞典3冊をとりあげ、その挿絵、写真、図（以下この3者を挿絵と称する）の総数と辞書の本文の総ページ数（A～Zまでの部分）を挙げてみて、1ページあたりどれくらいの割合いで現れてくるのかを知るために挿絵の数をページ数で割ってそのパーセンテージを出してみた。ただし、視角的な観点に限定するため表は除外した。

まず、ここに挙げた辞典の多くが2ページに1つの割合で挿絵を掲載している。NA は絵を多用することがキャッチフレーズになっているのでともかく、G は例文を多く載せ、語法的な詳しさを追求しているので少なくなっている。また、AL は英語を外国語として学ぶ人のためのものであるので絵が多いのもうなずける。ちなみに1951年増訂版になっている某社の英和辞典はその序文に「実用的価値を高めることを期待した」と述べてあっても挿絵は皆無である。

英語を日本語に置き換えるだけでは、日頃それほど英米の文物になじんでいない我々には十分に理解できない点が多いはずである。とくに視覚にうったえる body language については和訳だけでは全く何をいっているのか分らないケースが多く、説明があるとやや理解がすすみ、挿絵で、ほぼ様子がわかるのではないのだろうか。たとえば、

finger の項目で指を使ったいろいろな動作、

cross one's finger, point one's finger, shake one's finger などはその指を使って動作を行っている人物の表情も載せてあると、感覚的に理解がしやすく決して無駄ではないと思う。この部分では代表的な英和辞典の LH, G, S, P など素晴らしいと思う。ただ、視覚にうったえることを旨としている NP に、この点に関しては挿絵が少ないのが残念である。

英和辞典の総ページに対する挿絵、写真、図の数

辞書略号（出版年）	総ページ（本文）	挿絵、写真図の総数	左記のものの総ページに対する割合い＊
NC（1977）	1835	754	41％
U（1972）	1600	704	44％
LH（1984）	1678	851	51％
LH（1990）	1692	796	47％
NA（1983）	1576	2158	137％
G（1988）	1996	310	16％
S（1986）	1671	401	24％
P（1988）	1749	435	25％
W（1982）	696	185	27％
AL（1963）	1170	1010	86％
AL（1974）	1021	296	29％

＊　挿絵、写真、図の総数÷総ページ数
を表す。したがって、たとえばLH（1984）では2ページに1つの割合いで挿絵、写真、図が表れてくることを示す。

上記のように、予想していた以上に挿絵が多く使用されている。活字離れが進んでいる最近の生徒の立場からいえば、文字の圧迫から解放される効果も含んでいるようで好ましい傾向かもしれない。しかし、はたして適切に使用されているのかという疑問も生じてくる。次の項目でその一部を検証してみる。

Ⅲ．挿絵、写真の検討――その妥当性について

最近、英和辞典を見ていると、そこに使用されている挿絵（写真）に適切さを欠くものが見られるのが残念である。またあるものについては、多少ともそのことに通じた人が見ると納得できないところがある。

その例をあげてみると、

1．上に挙げた表にあるNA（1983），LH（1984），LH（1990）は同じ系統に属するものであるが、1983年から1990年といえばかなりの時間が経過している。それであるのに、submarineの項目を見るとまったく同じ写真が掲載されている。技術革新の時代にしかも最新の軍事技術の結晶である潜水艦なのであるから辞書のup-to-date性を保つためにも写真も取替えて欲しいものである。さらに、NAにおいては、その写真の下にnuclear submarineとしてある。多少、艦船に興味を持っている人が見たならば奇異な感じを持つはずである。なぜならば、写真に掲載されている潜水艦がもう時代遅れの形式であり、また艦尾にはディーゼル・エンジン推進の特徴である排気煙が出ているので。念のためJANE'S FIGHTING SHIPS（通称、ジェーン海軍年鑑）で調べてみるとこれはソ連海軍のもので、NATOのコードネームが“WHISKY V”classのものである。建造年が1951～1957と旧く、そしてmain machineryの箇所を見ると、diesel-electricとなっている。このNAの別の項目のdestroyerやdetailed drawingのところでは最新の英海軍のSHEFFIELD-classや米国戦略空軍の最新爆撃機B－1の挿絵が載っているのに残念である。cutawayの項目はまたまたソ連海軍のVICTOR-classのものが掲載されておりup-to-dateの面ではいいが、バランス面からいえば、どちらかの潜水艦は米国あるいは英国のものを載せてほしいものである。

2．次にLHのfrigateの項目では1984年版の方は説明だけ、1990年版のほうは写真が添えてある。こちらはOLIVER HAZARD PERRY-classの最新鋭艦のもので納得できる。しかし、その説明がどうも首肯しがたい。いわく、

『米海軍では駆逐艦より大きく英海軍では駆逐艦より小さい』

また、表中の英和辞典Sの該当するところを見ると、

『(英）では対潜水艦用の海上護衛艦、(米）では駆逐艦より大型の軍艦をいう』

英和辞典Gでは

『(英）小形駆逐艦：(米）中型戦艦』となっているが、これも上記のJANE年鑑で米国海軍のfrigateの主なものをひろってみると先に挙げた

OLIVER HAZARD-classが約3500トン

（満載排水量－以下同じ）

BROOKE-classで　3400トン程度

KNOX-classで　4200トン程度

となっている。

これに対して、destroyerの主なものを拾っていると、

SPRUANCE-classで　7800トン

KID-classでは　8300トン

もある。大小で識別するのではないはずである。ちなみに、巡洋艦（cruiser）にしても場合によっては駆逐艦（destroyer）より小さい時がある。上記の大型駆逐艦に対して
LEAHY-class の巡洋艦は　5700トン
でしかない。要するに艦籍の問題なのである。
またGの『中型戦艦』では下手をすると巡洋艦に誤解されるかもしれない。「中型の戦闘艦」くらいのほうが良いのではないだろうか。

Wを見ると現代的な意味での frigate はなくて、destroyer だけが small fast warship としてある。
AL（1974）にはそれぞれ frigate：（modern use）fast escort vessel. destroyer: a small, fast warship for protecting larger warships or convoys of merchant-ship. と簡単な説明が加えてある。この方式だと無難ではあるが、よくわからない。

3．さらに航空関係についてみると、上記の LH では両方とも aircraft and airport の項目で最新の旅客機 DC－10をあげて説明をし空港の挿絵も up-to-date なものになっている。しかし英英辞典 AL（1974）では、p. 20の各種航空機の写真の BOAC の旅客機と当時の NATO の新鋭機の JAGUAR（1972年実戦配備）が並んで掲載されている。BOAC が他の航空会社と合併がなって BA になったのが1971年であり、この辞典が出版されたのが1974年であるのでややバランスを欠いているのではないのか。BA の旅客機の写真を掲載すべきであろう。

NA においても flight deck のところで〔写真説明〕とあって flight deck から発進しようとする攻撃機とあって SKY HAWK 攻撃機が掲載されているが、これも現代の米海軍の航空母艦にはもう搭載されていないので HORNET あるいは INTRUDER くらいにかえて欲しいところである。

Ⅳ．おわりに

少し前の話になるが、外国の教科書で日本についての挿絵が適切でなく、たとえば日本の風景に中国や韓国のものが混ざっていたり、同じ日本のものでも、過去のものと現在のものが混在していて話題になっていた。挿絵はものごとを理解させる有力な手段ではあるが、誤った使い方をすると、有害なものになってしまう。したがってもっと細心の注意を払って、単なるファッションにはしてほしくないものである。

ここで艦船、航空機を主にとりあげたのは、それらが常に時代の先端にある科学技術の結晶であって、入れ替わりの激しいものであるからこそ、注意していてほしいのである。できれば、改訂のあるごとに写真くらいは検討を加えてほしいものである。

最後に、先の表に上げた英和辞典はどれも至れり尽くせりで、全体的にみれば、私のような素人にとっては、実に素晴らしい『芸術作品』であることもつけ加えておかなければならない。と同時に、こうした辞典の編集者の方々の努力には常に感服している次第である。

参考文献

・KENKYUSHA'S NEW COLLEGIATE ENGLISH-JAPANESE DICTINOANRY（新英和中辞典）　1977
・KENKYUSHA'S UNION ENGLISH-JAPANESE DICTIONARY（ユニオン英和辞典）　1972
・KENKYUSHA'S LIGHTHOUSE ENGLISH-JAPANESE DICTIONARY（ライトハウス英和辞典）1984
・KENKYUSHA'S LIGHTHOUSE ENGLISH-JAPANESE DICTIONARY 2nd edition（ライトハウス英和辞典　第2版）　1990
・KENKYUSHA'S NEW APPROACH ENGLISH-JAPANESE DICTIONARY（アプローチ英和辞典）　1983
・TAISHUKAN'S GENIUS ENGLISH-JAPANESE DICTIONARY（ジーニアス英和辞典）　1988
・OBUNSHA'S SUNRISE NEGLISH-JAPANESE DICTIONARY（サンライズ英和辞典）　1986
・PROCEED ENGLISH-JAPANESE DICTIONARY（プロシード英和辞典）　福武書店　1988
・WEBSTER'S NEW WORLD DICTIONARY OF THE AMERICAN LANGUAGE（WARNER BOOKS）　1982
・THE ADVANCED LEARNER'S DICTIONARY OF CURRENT ENGLISH（現代英英辞典）開拓社　1963
・OXFORD ADVANCED LEARNER'S DICTIONARY OF CURRENT ENGLISH new edition　開拓社　1974
・IWANAMI'S SIMPLIFIED ENGLISH-JAPANESE DICTIONARY（岩波英和辞典　新版）　1951
・忍足著『英和辞典うらおもて』岩波新書　1982
・JANE'S FIGHTING SHIPS　1983-84
・AN ILLUSTRATED GUIDE TO NATO FIGHTERS AND ATTACK AIRCRAFT（SALAMANDER BOOKS）